



上総十二社祭り神馬



上総広常「本朝百将伝」(明暦2年)
(出典:国立公文書館デジタルアーカイブ)

平安末期に、一宮周辺に大きな勢力を築いて覇を唱えた武将に、桓武平氏の一人、上総広常がいま
都で平清盛の平氏政権が隆盛を極めていたとき、平治の乱で敗れた源義朝の三男・頼朝が、治承4年(1180)配流先の伊豆で拳兵しました。しかしながら石橋山の戦いで敗れ、真鶴から安房に舟で逃れた頼朝は、まず広常を頼ろうとします。広常は平治の乱において、頼朝の異母兄・源義平に従って戦った名のある武将でした。人をやって広常の意思を確かめたところ、ためらいが見られませんでした。それに対し、広常と同族で下総に拠点を有していた下総介千葉常胤は、直ちに忠誠を誓ったので、頼朝の信頼は千葉常胤に傾いたとされます。その後、広常は二万騎を率いて隅田川のほとりで頼朝軍に帰参しましたが、頼朝の全幅の信頼を得ることはできませんでした。

その後、鎌倉に入った頼朝のもとで重臣として働きました。後の2代将軍・頼家誕生の際は、儀式において重要な役目を果たしています。しかし広常は尊大無礼な振る舞いが多く、頼朝の心に染まぬところがあったのでしよう。寿永2年(1183)12月に、梶原景時の讒言により、暗殺されてしまいました。

彼の死後、年が明けて頼朝は、玉前神社へ使者を送り、広常が生前玉前神社に奉納していた鎧一領を届けさせました。そこに付せられた願書で、広常は頼朝の大願成就を祈願していたことがわかり、頼朝は後悔しました。そこで広常の縁者のもので対してその旧領を安堵しました。ただ、広常の長子良常(能常)は、父の死に際して自害していたということで、広常所領の大部分は千葉常胤に与えられたそうです。その後、一宮を拠点とする千葉氏の活動は、宝治元年(1247)の三浦泰村の乱に際し、一門が滅亡して終了したようです。

広常が頼朝軍に合流したときの二万騎という軍勢の規模は、「吾妻鏡」に記されるものですが、大



玉前神社の顕彰碑

変巨大であり、その動員力に驚かされます。ちなみに千葉常胤が率いた軍勢は300余騎だったといわれています。一説には、広常の権力の源は、一宮地方の海岸部で産する塩と砂鉄ではなかったかとされています。

上総広常の本拠地は、実はどこにあったのか明確ではありません。一説としては、現在の高藤山ではなかったか、とする説がありますが、否定的な見方もあります。夷隅郡ではないかという説、一宮町にごく近い睦沢町の大谷木ではないかという説もあります。しかし、諸資料をつき合わせてゆくと、一宮町の近辺にあったのではないかと感じられます。江戸末期の一宮藩主・加納久徴は、高藤山を広常の居城跡に擬し、石碑を建てました。現在、高藤山の山頂で目にすることができます。



高藤山城址山頂の古蹟の碑

源頼朝を助けた武将・上総広常
— 平安末期から鎌倉初期の一宮



玉前神社 浦安舞